

## 小豆を使った神話の国のまちおこし

早川正樹

はじめに

毎年旧暦10月には、出雲地方では寒風が吹き荒れ、天候が悪くなることから「お忌み荒れ」と言われています。

旧暦10月10日の夕刻、出雲大社（いずもおおやしろ）から西方へ約1 kmにある日本海の稲佐の浜に大勢の信者や観光客が集まって来ます。全国から八百万の神々がお越しになるのを迎える「神迎神事」に参列するために全国の津々浦々からやってくる人々です。浜には篝火と神聖な斎場がしつられ、警蹕けいひつの流れるなかを神々が「竜蛇神」の先導でお越しになる時、いちじんの風が吹き、その場にいる人々は、神々がヒモロギに移られるのを実感します。

その後、絹垣で覆われた神籬（ヒモロギ）は、大国主大神（オオクニヌシノオオカミ）がお待ちになる出雲大社へと向かいます。お越しになった八百万の神々は、翌日から7日間に亘り「神議かみはかり」を行い、次の年の様々なことを話し合います。“縁結び”や“農産物の出来具合”などを話し合われ

ると言われています。このことから、10月を出雲地方では「神在月」、他の地域では「神無月」と区別されているのです。

### 1. 神話の中の『五穀の誕生』

出雲地方の人々は、自分たちが住んでいる所を「神々のふるさと」という人がいるほど、また子供たちは物心つくころから地元じよんの神楽（かぐら）に親しんでいるほど、出雲神話の中で生活しているといっても過言ではありません。

また行政も、平成24年の「古事記編纂1300年」を、観光の目玉と捉え、すでに活動を開始しています。

そんな古事記の神話の中にも、『五穀の誕生』について以下のように書かれています。

須佐之男命（スサノオノミコト）の乱暴に耐えかねて、天照大御神（アマテラスオオミカミ）が岩屋に隠れてしまった『天の岩屋』事件。

八百万の神々の策略が功を奏し、無事解決し明るさが戻ったとはいえ、須佐之男命をこのまま野放しにしておくわけにはいかない。そこで八百万の神々は集まり、須佐

之男命をどうしたものかと話し合い、須佐之男命にたくさんの贖罪の品物を出させ、ひげと手足の爪を切り、穢れを祓い清めたうえで、高天原から追放することに決めました。

高天原を追われた須佐之男命は、道すがら大気都比売神（オオゲツヒメノカミ）のもとへ立ち寄り、食べ物を求めました。そこで大気都比売神は、鼻や口、尻の穴などからいろいろな美味しい食材を取り出し、それを調理して出しました。その様子を見た須佐之男命は、汚れた食事を出されたものと勘違いし、すぐさま大気都比売神を殺してしまいました。

殺された大気都比売神のからだから様々な物が生まれました。頭からは蚕が、両の目からは稲の種が、両の耳からは粟が、鼻からは小豆が、陰部からは麦が、尻からは大豆が生まれました。そこへ神産巢日神（カミムスヒノカミ）が現れ、それらを五穀の種として葦原中国（アシハラノナカツクニ）へ持って行くよう須佐之男命に命じました。

これが、地上における養蚕と農業のはじまりとなりました。

## 2. 出雲國風土記の「国引き神話」と出雲への神集い

733年に編纂し大和朝廷に提出された「出雲國風土記」の意宇郡（おうのこおり）の条に、いわゆる「国引き神話」が載っています。

要約すると以下のとおりです。

八東水臣津野命（ヤツカミズオミヅヌノミコト）という神様が、「出雲の国は狭い布のような未完成な国だ。最初に小さく作りすぎた。だから縫い足そう。」とおっしゃって、朝鮮半島の新羅の御崎の余った土地に綱かけて引いてきたのが杵築（現在の出雲市大社町）の御崎である。… 中略 …

また、北陸の能登の珠洲市あたりの御崎の余った土地を綱かけて引いてきたのが美保（現在の島根半島の最東端）の崎である。

このことが意味することは、時の出雲王国（出雲朝廷）が主宰した神集いに参集した神々が、日本国内（主に日本海側）はもちろん韓半島からも馳せ参じていたことを示すものです。

言い換えれば、出雲王国は日本海を使って広く交易していた大国であり、韓半島を経て製鉄法（たたら）や農業の種などが渡来して来たということを表していると思います。

百済系の官僚で占められている大和朝廷に提出する「出雲國風土記」に、新羅系の神々の寄り合い評定を記すには、「国引き神話」という夢物語で表現するしかなかったと想像できます。（出雲 神在月の謎にせまる 安達巖 著：三一書房）

## 3. 「ぜんざい」に関する古文獻

八百万の神々が出雲の地に参集され、この時に執り行なわれるのが『<sup>かみありさい</sup>神在祭』といわれる祭事です。出雲での「神議」のために参集された内外の神々に、出雲朝廷が歎

待用として用いた小麦団子が「神在餅（じんざいもち）」であり、その延長線上にあるものが今も女性が好物としている「ぜんざい」であり、「神在（ジンザイ）」が訛ったものです。（出雲 神在月の謎にせまる 安達巖 著：三一書房）

ここで、古くからの「ぜんざい」に関する古伝を挙げておきます。

（注）原文のまま。（ふりがな）は筆者加筆

①「祇園物語」（寛永年間：1624年～1643年）

出雲國に神在（じんざい）もちいと申事（もうすこと）あり。京にてぜんざいもちいと申八。これを申あやまるにや。十月に八日本國の諸神ミな出雲國にあつまり玉ふゆへに。神在（かみあり）と申なり。その祭に赤豆をにて汁をおほくし。すこし餅を入まいらせ節々まつり候を。神在（じんざい）もちいと申よし。

②「梅村載筆」（林羅山著：1583年～1657年）

赤小豆をすりて煮たる餅を、ぜんざいもちと云ふ事は誤りなり。しんざい餅と云べし、神在とかくなり。出雲國の大社は、むかしより十月には諸神相会し玉ふと云ならはせり、故に余は神無月と云に、出雲にては神在月といひて、祭りにかの餅を煮てまつる事なり、これを学びて神在餅と云か。

③「倭訓栞」（寛文十年：1670年）

出雲国秋鹿（あいか）郡佐太（さた）社に、毎歳十月十六日より廿五日まで祭儀あり。これを神在祭（じんざいまつり）といふ。土俗誦経念仏を禁じ、赤小

豆をもて饅（もち）を煮て賀せり。これを神在餅といふ。いま俗にぜんざいもちひといふは、転訛せるなりと。されば出雲にては神無月といふを忌みて、神有りの月といふも、これによりて云ふなりといへり。伊勢にては粉もちといふ。上総にてはじざいもち、土佐にてはじんざい煮、京・江戸にては善哉餅（ぜんざいもち）といへり。

④「塵泥」

出雲の国人（くにひと）談に、出雲にては、十月諸神来り集まり給ふとて、餅をつきて赤小豆の粉を付けて、神に供へ奉る。是をジンザイモチといふ。ジンザイモチは神在餅と書くといへり。他国にてあづき餅をゼンザイモチといふ。ジンザイモチの誤り也といへり。

⑤「雲陽誌」（享保2年：1717年） ※ 秋鹿郡宮内 佐陀大社の条

ある人の云此祭日（注：十月の神在祭）俚民白餅を小豆にて煮家ことに食これを神在餅といふ、出雲の國にはしまる、世間せんさい餅といふはあやまりなり。



出雲大社 御仮殿（平成25年、正遷宮）

#### 4. 「日本ぜんざい学会」の誕生

出雲地方では、昔から“ぜんざい”は、“じんざい”が訛ったものという言い伝えがまことしやかに言われていました。

出雲市内でホテルを経営する田邊達也は、“ぜんざい”で何とかまちおこしができないものかと、仲間や行政（食育担当）や商工会議所と様々な“ぜんざい”を試食して試行錯誤を繰り返していました。

そんな時に相談した島根県立古代出雲歴史博物館の品川学芸員から、“ぜんざい”の始まりが出雲の国の『神在祭』の際に振る舞われた「神在餅」に由来するといふ数々の古文献を紹介されたのです。

この文献に突き当たったことが、“ぜんざいでまちおこし”をしようとするきっかけになった第一の要因だったと思います。

平成19年2月、田邊は『ぜんざい発祥の地は、出雲』をコンセプトにした「日本ぜんざい学会」を立上げ、出雲市内で和菓子を製造している老舗の坂根屋の社長に相談し、まちおこし活動を実践していきます。まず“出雲ぜんざい”の条件を、「小豆は出雲産の大納言小豆を使うこと。餅は紅白の丸餅（餅粉を使った白玉団子も可とする）」としました。

次に、たくさんの人々に“出雲ぜんざい”を味わってもらおうと考え、行政のイベント（2月の出雲くにびきマラソン、5月のにつぼん丸入港祝いや、全国市長会中国支部総会）に参加して振舞い事業を行い、一定の評価をいただくことができました。また、他のぜんざいと差別化を計るた

め「日本ぜんざい学会」の商標登録もいたしました。5月には、「出雲ぜんざいの日」を日本記念日協会に登録申請し、10月31日を「出雲ぜんざいの日」にする承認を受けました。

余談ですが、なぜ10月31日が「出雲ぜんざいの日」かというと、1つにはその日が神在月に当たるから、そしてもう1つは“1031”が“せんさい”に語呂合わせになるからです。

また、学会の会員募集も始めました。まず、田邊が塾長を務めている「出雲まちづくり人づくり和話塾（わ～わじゅく）」の塾生を中心に正会員（ボランティアで学会を応援する会員）を募集しました。

因みに、この塾の目的とするところは、「わ～わ（出雲の方言で我々という意味）のまちを、わ～わの知恵と情熱で活性化し、全国に誇れるまちづくりや、観光客にも住民にも優しい人づくりを目指し、塾生個々の優れた技を結集したプロフェッショナル（玄人）集団として“出雲のオンリーワン”を開発し、全国に発信していく」でありました。

次には、“ぜんざい”で商売をする飲食店や和菓子屋などの事業会員を、学会の活動を資金的に支援していただく賛助会員を募りました。かくして、平成19年7月1日に「日本ぜんざい学会」の設立総会を開催するに至りました。この時点での会員数は、正会員19名、事業会員20社、賛助会員7団体・個人でした。

同日開催した設立祝賀会には、学会顧



出雲・食の祭典（出雲ドーム）

問を引き受けていただいた出雲市長を始め、地元選出の県会議員、市会議員、島根県や出雲市、島根県観光連盟、商工会議所やJA、観光施設の方々など、総勢155名の皆様にお祝いしていただき、今後の学会活動に意を強くしたと同時に、活動の責任の重さも痛感したものでした。

## 5. 「日本ぜんざい学会」のこれまでの活動

### (1) 各地のイベントに出展

学会の活動は、まず各地のイベントに出展し、“ぜんざい発祥の地は、出雲”を広く知らしめることから始まりました。

出雲市内だけでなく、松江市内や玉造温泉にも出掛けました。松江城では3日間に亘り、国際ジャズフェスティバルの会場で純和風のスイーツの販売をしました。

東京・日本橋にある島根県のアンテナショップや、横浜市・みなとみらいのパシフィコ横浜で開催された「旅フェア2008」にも出展販売し、全国に向けての発信もいたしました。

また、広島市内で開催される「島根ふ

るさとフェア」や、出雲市内で開催される「出雲ブランド・食の祭典」にも出展し、地元の食の紹介にもひと役買ってきました。



島根ふるさとフェア（平成21年）



「日本ぜんざい学会」設立祝賀会（平成19年）

### (2) サイトの開設

学会の設立に併せて、平成19年7月ホームページを立ち上げました。学会からのお知らせや学会新聞を掲載している他、ブログ「ぜんざい食べ隊」を併設して旬の情報を発信しています。

### (3) マスコミを使った広報活動

学会設立前に、東京と大阪の雑誌や新聞

各社を訪問し、“ぜんざい発祥の地は、出雲”というコンテンツを紹介し、取材に来ていただくよう要請して回りました。

◆旅行雑誌・旅行読売、るるぶ、まっぷる、旅の手帳、西の旅、じゃらん（関西版）

◆情報雑誌・・コロムブス、WaSaBi、東京人、ぴあ

◆旅行新聞・・観光経済新聞、旅行新聞、トラベルニュース

◆一般新聞・・産経新聞、毎日新聞、東京新聞、夕刊フジ

この時の各社訪問は、後に各社の取材につながり、また他のマスコミからの取材依頼も年々増加し、学会の活動を全国に発信する大きな力になったことは否めません。

#### (4) 旅行商品への取組

旅行商品は、かつてのような神社仏閣、名所旧跡などを観る（See）形態に、趣味趣向を満足させたり自ら体験したりする（Do）形態をプラスするようになってきています。

その一つのコンテンツとして、旅先での「地元ならではの食・スイーツ」としてぜんざいを組み込んでもらう営業活動も行ないました。

現在では、山陰地区への路線を持つ航空会社のホールセール商品（個人型旅行商品）や、大手旅行会社の出雲地方向けの旅行商品に「お楽しみクーポン」として組み込んでいただき、他の「食」とチョイスする形でお客様に喜んでいただいています。（現在、4社が商品化しています）

#### (5) 小豆の生産農家の拡大

出雲産の大納言小豆は、丹波産の大納言にはまだまだ程遠いものがありますが、結構大粒でぜんざいにした時ホクホク感がありお客様に喜ばれています。

学会の「出雲ぜんざい」のコンセプトは「出雲産の大納言小豆と紅白の丸餅」なのですが、学会設立当時は半年も過ぎれば出雲産の大納言小豆は底を付く状況でした。事業会員の和菓子屋と出雲市の農協などの努力により、現在は38軒の農家に大納言小豆を作付けしてもらえるようになりました。それでも10ヵ月を過ぎると品薄になる状況で、奥出雲産の小豆で補なっています。

出雲の名物でもある「そば」の栽培に比べると手間も掛かるということで十分な栽培農家数には達していませんが、少しずつでも小豆を作っていただけの農家を拡大していくのが今後の課題でもあります。

#### (6) 直営店の開業と、門前町の活性化

平成19年10月25日に、「日本ぜんざい学会壺号店」（直営店）を出雲大社の門前町（神門通り）に開店し、学会のアンテナショップとしての活動が始まりました。

神門通りは、かつてはJR大社線の大社駅から出雲大社正門までの約1kmの参詣道として沢山の参拝客が往来していましたが、平成2年のJRの廃線によって人通りが途絶え、空き家も目立つようになっていました。壺号店の開業以来、地元や町外の新規参入が増え（11店舗が新規開店）、それに伴って町歩きをする観光客も目に見

えて増えてきています。また、神門通りの店舗の有志が集まって「神門通り甦り（よみがえり）の会」を新たに立上げ、毎月1回の「軽四朝市」や祭事に併せて様々な「おもてなしイベント」を企画するなど、地元の人々の意識改革にも一役買っていることは「出雲ぜんざい」効果の一つと思います。

#### (7) 行政の取組

10月31日が「出雲ぜんざいの日」として記念日登録されたことは前述しましたが、平成19年と20年の10月31日は、出雲市内の幼稚園から中学校までの給食にデザートとして「ぜんざい」が出されました。このことは、出雲市民に“ぜんざい発祥の地は、出雲”だということを認識してもらおうと同時に、郷土愛の醸成にも繋がる食育の一環として行政が学会の取組を是とした大きな事業だったと評価しています。

また、市内外から出雲市にお越しになるお客様へのお土産として「レトルトぜんざい」を採用しており、これも「出雲ぜんざい」の全国発信にとって大きな助力になっていると思います。

#### (8) 女子高校生のぜんざい

学会の活動に呼応するかのようには、島根県立出雲商業高等学校の経済調査部の女子生徒が部活動の一環として「縁結びぜんざい」を開発しました。

学会はこの活動をバックアップする意味から、平成21年7月15日に日本ぜんざい学

会の「特別会員」として認定し、事業会員が生徒の活動のお手伝いをするにしました。女子生徒の柔軟な発想力が功を奏し、ハート形や注連縄を模した紅白の餅を考案したオリジナルぜんざいが、島根県教育委員会の「産学官連携による課題研究事業」に採択され、商品化を加速し、大手コンビニ（ファミリーマート）の店頭に並ぶという快挙を達成するまでになりました。

#### (9) ぜんざいマップの作成

出雲地方にお越しになる観光客などに、「出雲ぜんざい」を味わったり、お土産としてお買い求めいただくための資料として、「ぜんざいマップ」を作成して観光案内所や各店舗に置いています。

また、出雲路の名物の一つ「出雲そば」の店でも“そばがき”や“そば団子”を使った「出雲ぜんざい」を販売している店があり、それらもマップに掲載してお客様への情報ツールに利用していただくことにしました。

#### (11) 愛Bリーグへ加盟

今年9月18日～19日の2日間、厚木市内で開催された「B級ご当地グルメの祭典！B-1グランプリ in 厚木」には首都圏での開催だったこともあり、2日間で43万5000人の来場者がありました。

この大会を主催しているのが「B級ご当地グルメでまちおこし団体連絡協議会」（通称：愛Bリーグ）です。この団体の存在を始めて知ったのは、学会発足前に最初

に東京の雑誌、新聞社を訪問した時、観光経済新聞社の編集長の談からでした。

以来数年、地元で出雲ぜんざいを使ったまちおこし活動を展開した後、平成20年12月に加盟申請書を提出、翌21年5月の総会で準会員として加盟承認されました。それと同時に、愛Bリーグ近畿・中国支部会（現在は、近畿・中国・四国支部会に改称）の会員にも加盟承認され、支部会員との連携で様々な活動のノウハウを吸収することができました。

この間の連携活動は、日本ぜんざい学会がまちおこし活動を実践していく上で一段スキルアップできた原動力になったと思います。そして平成22年4月の総会で晴れて正会員に承認され、B-1グランプリ初出展の権利を得て、今秋厚木大会に初出場しました。

2日間で、今まで経験のしたことのない3200食強を売り上げましたが、売上げよりも全国の人々に“ぜんざい発祥の地は、出雲”だということをアピールできたことが大収穫だったと思っています。

おわりに

最近全国各地で、「〇〇食の祭典」とか

「××グルメグランプリ」などの“食”に関わるイベント、お祭りが大流行です。しかも、どのイベントもたくさんの人々が訪れ大盛況です。当分、“食”関連のイベントは続くだろうと思われます。

「景気が悪くなればなるほど“B級グルメ”に人が集まる」という人もいますが、現実をみればあながち間違っているとも言えません。

B級グルメの草分け的存在の「富士宮やきそば学会」が先日10周年記念会を開催しましたが、過去9年間の経済波及効果は439億円に上ると推計されています。その内訳は、麺の製造・販売、やきそば店の売上げの他に、キャベツやソースなどの関連素材、テレビや新聞などのメディア、そして県内外から訪れてくる観光客とその波及範囲は広大です。富士宮市も2004年から「フードバレー構想」を掲げ、生産者や企業と連携して食を通じた町づくりに取り組んでいます。

我が「日本ぜんざい学会」も、地域の行政・生産者・商工業と連携し、「地産地消のまちづくり」を目指して、地道に一步一步継続した活動を目指していこうと思っています。